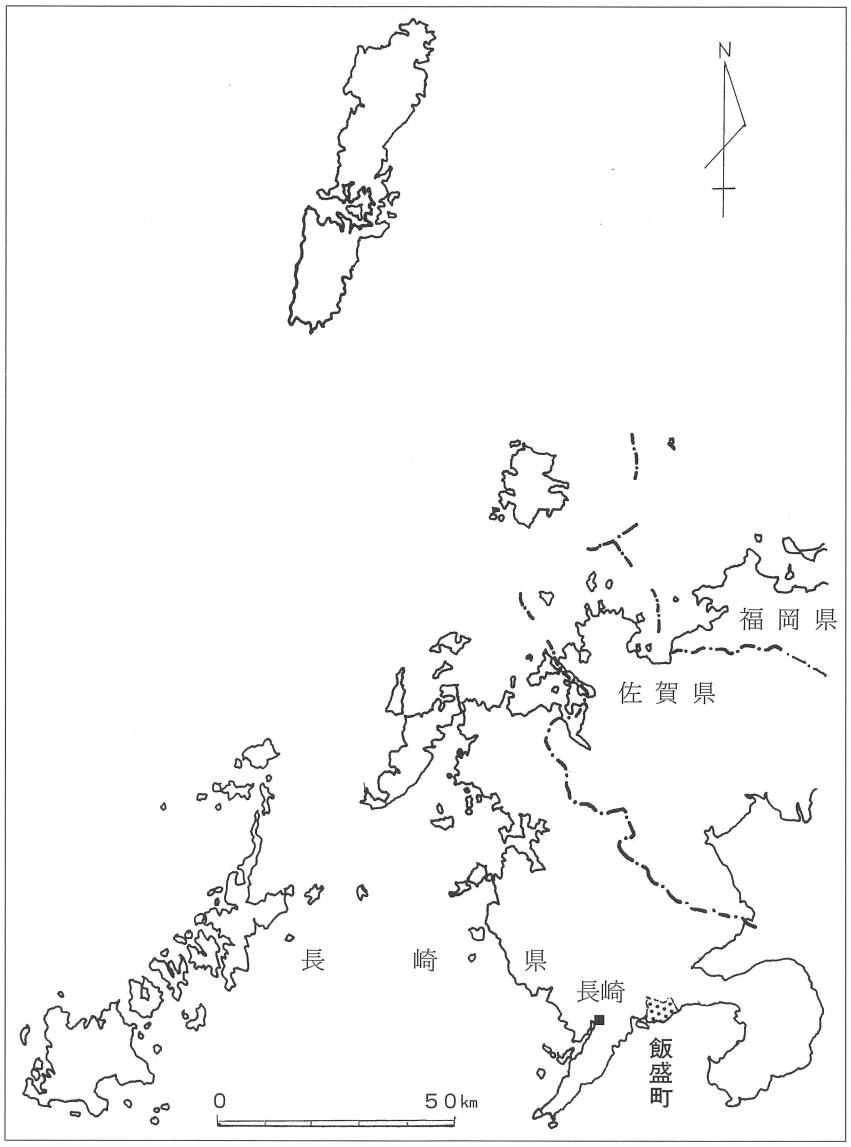
飯盛町文化財調査報告書第３集

飯盛鬼塚古墳



２０００．３

長崎県飯盛町教育委員会

発 刊 の 言 葉

飯盛鬼塚古墳は、後田名鬼塚の地に所在するものです。

この地は飯盛町の東部に位置する丘陵地帯で広大な畑地が広がっています。

平成11年度に始まった圃場整備事業に伴い、予てよりこの地一帯には鏃や土器の破片等が散乱し、勾玉の出土もあって、県文化課の指導に応えて、県考古学会々長、正林　護　先生のご指導を受け、試掘をしたところでした。

試掘箇所からの出土資料には成果らしきものは出ませんでしたが、地権者からの要望で、畑の隅の石の塚を調査したところ、古墳発見の切っ掛けとなった次第です。

古墳位置からの景観は、橘湾が一望視され、眼下には前ノ島・向島の美しい姿を眺めることができます。

古墳の主人公は、この観望を己の支配権として固執していたのではないかと偲ぶことができます。

ともあれ、町文化遺跡にとっては貴重な文化遺産が日の目を見たことですので、地権者である、後田博幸氏のご好意と町当局のご理解もあって、整備保存に努め、古墳文化の教材として、いつまでも残しておきたいと考えています。

調査に当たっては、正林　護先生の学術的なご指導と地元関係者のご支援ご協力に感謝申し上げ発刊のご挨拶といたします。

平成12年３月31日

飯盛町教育長　　橋　本　忠　彦

凡　　例

1．本書は、長崎県北高来（きたたかき）郡飯盛町後田名2387番地所在の飯盛鬼塚古墳の発掘調査報告書である。

2．本古墳は、平成11年度県営畑地帯南部総合整備事業に伴う、埋蔵文化財確認調査によって発見されたが保存整備が計られることになり、その一環として飯盛町教育委員会が調査主体となり発掘調査を行った。

3．調査は長崎県考古学会の正林　護が担当した。

4．現地での地形測量は、正林　護・久富達也・福島義行・里　大司・里　夏枝・渋谷しのぶが行った。

5．遺構実測は正林　護・久富達也が行った。

6．発掘調査後の整理作業は、正林　護・久富達也・渋谷しのぶが行った。

7．本古墳に関する遺物は飯盛町教育委員会が保管している。

8．本書の編集は正林が行った。

本 文 目 次

［1］ 調査の発端と経過……1
1．分布調査……1
2．試掘調査……1
3．飯盛鬼塚古墳の発見……1
4．飯盛鬼塚古墳の取り扱い……4
5．飯盛鬼塚古墳の調査……4
［2］ 飯盛鬼塚古墳の立地・環境……4
1．地理的環境……4
2．歴史的環境……5
［3］ 飯盛鬼塚古墳の調査……9
1．飯盛鬼塚古墳の調査……9
2．飯盛鬼塚古墳の構築……9
［4］ 遺　　構……9
［5］ 遺　　物……9
1．須恵器……12
2．金属器……12
3．石　器……12
［6］ ま と め……15

挿 図 目 次

第1図　飯盛町管内区域・遺跡分布図……2～3
第2図　飯盛鬼塚古墳周辺実測図……8
第3図　飯盛鬼塚古墳実測図……10～11
第4図　遺物①……13
第5図　遺物②……14

図 版 目 次

図版1　飯盛鬼塚古墳の周辺
図版2　遺構（全景・奥壁）
図版3　玄室（西壁・東壁）、床面敷石
図版4　奥壁外側と西壁内側の根石
図版5　遺物出土状況（奥壁・南隅）と床面完掘状況
図版6　遺物①（須恵器）
図版7　遺物②（須恵器・石器）
図版8　遺物③（金属器）、調査にたずさわった人々

［１］調査の発端と経過

１．分　布　調　査

平成11年度、長崎県内においても県営畑地帯総合整備事業が県下一円において計画され、飯盛町においても「南部総合整備事業」（総面積186ヘクタール）が計画された。長崎県文化課は事前に当該事業予定地について、埋蔵文化財包蔵地有無確認のため同町後田地区の分布調査を行い、３地点について試掘調査の必要を指摘した。

２．試　掘　調　査

県文化課による分布調査の結果をうけ、飯盛町教育委員会は同町経済課と協議のうえ、同年９月14日～９月21日の間、試掘調査を実施した。試掘調査は、２ｍ×２ｍの試掘壙19カ所を設定して実施した。試掘調査を実施したのは、（Ａ地区）後田名1997・2664・2441・2424番地、（Ｂ地区）後田名2000・2007・2378・2388・2387・2389・2409番地、（Ｃ地区）後田名829・551・557・558・730・726・564・562番地で、合計76㎡である。試掘調査の結果、各試掘調査地点いずれも遺物包含状態のないことが判明した。

試掘調査関係者

（飯盛町教育委員会）

調査統括　橋本忠彦　教育長

同 総括　佐田　脩　教育次長

現地担当　松本英俊　派遣主任社会教育主事兼社会教育係長

同 補佐　土橋伸秀　社会教育係長

調査担当　正林　護　長崎県考古学会

（飯盛町経済課）

総　　括　中山卓久　課長

測量担当　池下　巖　参事兼耕地係長

同 補佐　後田一光　主査

（現地協力）吉塚光喜 後田名区長

（参 加 者）久富達也・後田　廣・梅本秋光・福島義行・里　大司・里　夏枝・中川ユキエ・原田順子・木下ツギヱ・平古場さよみ・後田道子・後田キクエ・後田百枝・香田ウメヨ・吉塚久江・中村　香・草葉スマヱ・下釜真智子・後田郁子・平野キクエ

３．飯盛鬼塚古墳の発見

試掘調査中、後田名2387番地（畑地）の東隅に大型礫の上に塵芥1.5m程度が積もり、雑草が繁茂した箇所があり、土地の方々のと協議して塵芥を除去し清掃した。その結果、墳丘を失っているものの軸線をほぼ南北にして南面した古墳の横穴式石室であることが判明した。遺存状況は、概要次のとお

第１図　飯盛町管内区域・遺跡分布図

凡例
■縄文時代
▲弥生時代
□古墳時代
○奈良時代
△中　　世

1．榎原遺跡
2．山ノ口遺跡
3．平古場城跡
4．平古場遺跡
5．岡城跡
6．普同寺下遺跡
7．西馬場遺跡
8．開遺跡
9．囲城跡
10．東城跡
11．田結条里跡
12．大門貝塚
13．池下石棺群
14．築崎遺跡
15．飯盛鬼塚古墳
16．下屯山遺跡
17．上原遺跡
18．下釜石棺群
19．下ノ釜貝塚

りであった。

〈玄　室〉巨石を用いた腰石のみが残り、奥壁・東壁（２枚）・西壁（２枚）・西側袖石・玄室入り口の框石が遺存する。

〈前　室〉西壁腰石（１枚）が遺存する。

〈羨　道〉完全に消滅

〈その他〉玄室内に天井石と考えられる傘状の巨石１が反転落下していた。

４．飯盛鬼塚古墳の取り扱い

試掘調査終了後、飯盛町教育委員会は遺跡発見届を提出するとともに、同町経済課と飯盛鬼塚古墳の取り扱いについて協議をもち、遺構の現地保存と公開整備する基本方向と、遺跡整備の前提として遺構を精査する方向を確認した。なお、古墳の名称は協議のうえ「飯盛鬼塚古墳」とした。

５．飯盛鬼塚古墳の調査

飯盛町教育委員会は、平成12年２月３日から同月12日までに８日間、発掘調査を実施した。

調査関係者

（飯盛町教育委員会）

調査統括　橋本忠彦　教育長

同 総括　佐田　脩　教育次長

現地担当　松本英俊　派遣主任社会教育主事兼社会教育係長

同 補佐　土橋伸秀　社会教育係長

調査担当　正林　護　長崎県考古学会

（飯盛町経済課）

総　　括　中山卓久　課長

測量担当　池下　巖　参事兼耕地係長

同 補佐　後田一光　主査

（現地協力者）吉塚光喜（後田名区長）・後田博幸（土地所有者）・後田三郎（耕作者）・田中誠司（土地所有者）

（参　加　者）久富達也・福島義行・里　大司・里　夏枝・渋谷しのぶ

［２］飯盛鬼塚古墳の立地・環境（第１図）

１．地 理 的 環 境

〈陸地〉

飯盛町は、長崎県の南部、北高来郡にあり西隣は長崎市に、東・北隣は諫早市に接している。この

一帯は島原半島に連なる「諫早地峡」の南辺にあたり、橘湾に南面していて島原半島と天草諸島を遠望することができる。町の西辺、長崎市に接する位置に松尾岳（395m）と飯盛山（294m）があるが町域全体は低平な丘陵地帯になっていて、町の中央を国道251号線が東西に貫いている。

〈愛野断層崖と向背湿地〉

諫早地峡南海岸は島原半島に発する愛野断層崖に連なり、急崖が連続している。急崖は部分的に小規模な砂嘴ないし礫丘に扼されて深く湾入した向背湿地が見られる。南高来郡千々石町には『肥前風土記』に記載のある後背湿地があり、飯盛町東隣の北高来郡森山町唐比・飯盛町西辺の大門は典型的な海岸部後背湿地である。飯盛町の中央部にも橘湾から深く湾入し、かって「月ノ港」と称された後背湿地があり、現在「開名」の干拓水田地帯になっている。これらの後背湿地直接周辺は縄文時代以降、いずれも遺跡が集中している。飯盛町の場合、後背湿地中央を江ノ浦川が南流して橘湾に注ぐが、河口部分では幅100m以下にまで傾斜地が迫り、西方から伸びる長さ250m程度の礫丘に扼された良好な江ノ浦漁港になっている。

〈古墳の周辺〉

飯盛町の東辺、中山名・上原名・後田名一帯は100～150mの丘陵地帯になっている。飯盛鬼塚古墳のある後田名は100m台の丘陵になっているが、南辺は急傾斜面をなして海没する。付近一帯は現在畑地に利用され人参栽培が盛んである。現在後田名を東西に丘陵背稜線が走り、東方向は国道251号線に通じ、西方向は諫早・江ノ浦間を結ぶ県道41号線に通じている。飯盛鬼塚古墳の位置は目標となる地物に乏しいが、県道41号線との分岐点から東方向約１㎞にあり、標高115mの緩傾斜地に位置している。飯盛鬼塚古墳から南方向を見ると、眼下に前ノ島・向島があり、橘湾の彼方に島原半島と天草島の景勝が展開する。

2．歴 史 的 環 境

長崎県の南部は、有明海の一部である諫早湾（泉水海）と橘湾・大村湾とに挟まれた狭い地峡になっており、この地峡を介して島原半島（島原市・南高来郡）に連なっている。この地峡部分は行政上諫早市と北高来郡であり多くは有明海の西辺、諫早湾（泉水海）に面している。飯盛町は地峡の南辺にあって、この立地の違いは、橘湾側と有明海側とではかなり異なった様相を見せる。飯盛鬼塚古墳の歴史的環境を、この違いによって蔑見してみよう。

〈旧石器時代〉

有明海の北岸は多良岳の裾野にあたる地域で200m以上の高い標高域に小長井町山茶花遺跡(1)・諫早市川頭遺跡(2)などこの時期の遺跡が多く、大村湾南岸の丘陵にも西輪久道遺跡(3)・鷹野遺跡(4)など、この時期の遺跡がある。一方橘湾岸ではこの時期の顕著な遺跡に乏しい。

〈縄文時代〉

この時期、有明海沿岸は西彼杵郡多良見町伊木力遺跡(5)など拠点的遺跡がある一方、橘湾沿岸や長崎半島に比較して遺跡数は少ない。一方橘湾沿岸や長崎半島では研究史も古く、先述した海岸部の向

背湿地周辺ないし砂丘部に遺跡が立地している。諫早市有喜貝塚(6)・ 飯盛町下ノ釜貝塚(7)・ 同築崎遺跡(8)・同大門遺跡(9)などがあり、縄文早期押型文土器の遺跡は乏しいものの、前期轟式土器の段階から同中期太形凹文土器の段階を除いて、同晩期に至る遺跡が広く分布している。内容的には海洋的性格が強く見られる。

〈弥生時代〉

この時期、遺跡の数でいえば有明海沿岸には比較的多くの遺跡が分布する。縄文時代の終末～弥生時代前期～中期の遺跡が多く、支石墓も出現する。大村・諫早市境界の風観岳支石墓群(10)・有明海北岸小長井町井崎支石墓群(11)であるが、前～中期には遺跡数が比較的数多く見られる。有明海沿岸西奥では諫早市長田貝塚(12)のように弥生時代には珍しい比較的大型の貝塚がある一方、同立石遺跡(13)のように細形銅剣を副葬した甕棺群があり、森山町西ノ角遺跡(14)のように石包丁・鉄製鎌が出土し甕棺埋葬があるなど水田耕作の要素をもつ遺跡がある。この地域では弥生時代中期後半になって遺跡数が減少する。一方橘湾沿岸～長崎半島では、有喜貝塚(15)など、海洋依存型の遺跡が見られるが、長崎半島を含めて中期後半に至って遺跡数は減少傾向をたどっている。

〈古墳時代〉

有明海沿岸・橘湾沿岸共に遺跡の数は減少する。特に高塚古墳は大村市地域と島原半島北部の狭間にあって数少ない地域である。多良岳西麓大村市域は長崎県内で高塚古墳の集中度の高い地域であるが、古墳時代の墳墓は箱式石棺群がまず出現し、諫早市本明石棺群(16)のように諫早市域にまで拡大する。高塚古墳の造営は遅れ6世紀代後半以降に多く出現する。有明海北岸では小長井町では長戸鬼塚(17)・丸尾古墳(18)など線刻画を描く高塚古墳があり佐賀県西部の影響を受けた古墳があり、10基未満を数える。有明海南岸でも未調査ながら森山町柏原1～3号墳(19)・同町椿川1～3号墳(20)、諫早市小野古墳(21)など10基未満ながら集中傾向を見せる。一方、橘湾岸でも飯盛町下釜石棺群(22)・長崎市曲崎古墳群(23)が知られるが、下釜石棺群は時期を特定できる資料に乏しいものの内法が長大な石棺（170cm）であることから古墳時代と考えられるという。曲崎古墳群は竪穴式石室の特徴をとどめている横穴式石室をもつ。この両古墳群は橘湾沿岸における数少ない古墳であるが海を生産の場とした海民集団の古墳群と考えられている。

【参考文献・注】

1．正林　護「小長井町の先史・古代」『小長井町郷土誌』小長井町郷土誌編纂委員会1976

2．昭和46（1971）諫早市教育委員会による緊急発掘調査が行われた。報告書未刊

3(a)．長崎県教育委員会・地域振興整備公団『西輪久道遺跡・鷹野遺跡』諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査1981

(b)．長崎県教育委員会『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第64集1983

(c)．長崎県教育委員会『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』長崎県文

化財調査報告書第74集1985

4(a). 3(a)に同じ

(b).『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第85集　長崎県教育委員会1986

5(a). 松藤和人『伊木力・熊野神社遺跡発掘調査概報』多良見町教育委員会1985

(b). 松藤和人ほか『伊木力遺跡』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室1990

6(a). 浜田耕作ほか「肥前国有喜貝塚発掘報告（上・下）」『人類学雑誌』第41巻第1・2号1926

(b). 秀島貞康ほか『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書第10号1984

7. 村川逸朗『下釜石棺群・下ノ釜貝塚』飯盛町文化財調査報告書第 2集1995

8. 藤田和裕ほか『築崎遺跡』飯盛町文化財調査報告書第1集　飯盛町教育委員会1990

9(a). 津田繁二「我が長崎県の先史時代及び原史時代の遺跡遺物の概略に就て」『長崎談叢』第26輯1940

(b). 長崎県教育委員会『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第122集1955

10. 諫早市教育委員会『風観岳支石墓群調査報告書』諫早市文化財調査報告書第1集1976

11. 正林　護「小長井町の先史・古代」『小長井町郷土誌』小長井町郷土誌編纂委員会1976

12. 諫早市立長田小学校裏手にあった貝塚で弥生中期初頭の土器が確認されているが未調査のまま開発によって崩壊した。

13. 正林　護「諫早市出土の銅剣」『九州考古学』41-44、1971。文献では「立石遺跡」としたが、長崎県教育委員会刊行の遺跡地図（平成6年）では「諫早農業高校遺跡」となっている。

14. 長崎県教育委員会『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集1985

15. 6に同じ

16. 昭和44年（1969）長崎県教育委員会によって発掘調査が行われた。報告書未刊

17. 長崎県教育委員会『長崎県文化財調査集報Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第57集1982

18. 未調査であるが、奥壁に斜格子文の線刻がある。

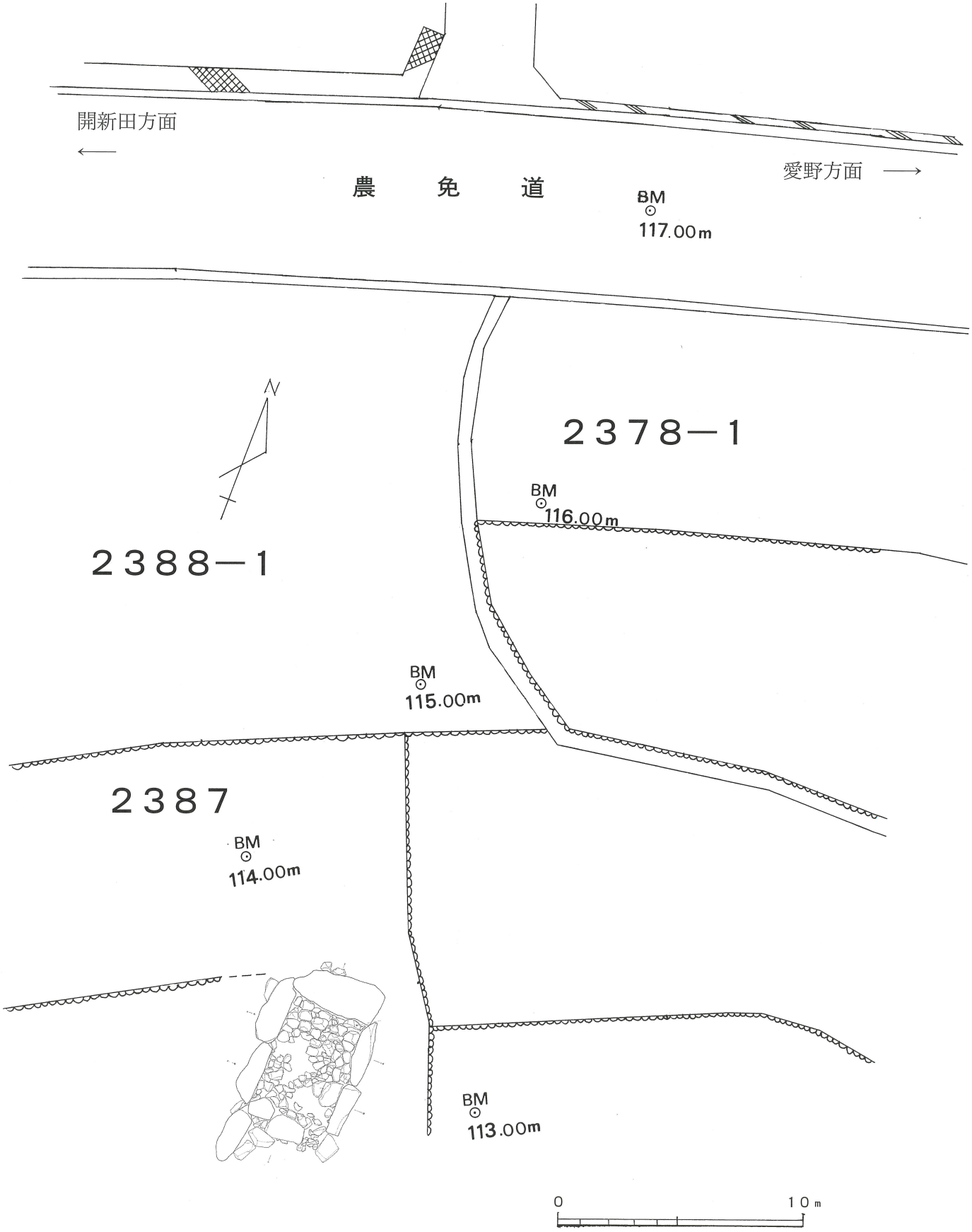
19. 森山町井牟田盆地西方の傾斜地にある。未調査

20. 森山町井牟田盆地南方の傾斜地にある。未調査

21. 高野晋司ほか「小野古墳の調査」『長崎県文化財調査集報第Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第35集長崎県教育委員会1978

22. 7に同じ

23. 長崎市教育委員会『曲崎古墳群調査報告書』1977



第 2 図　飯盛鬼塚古墳周辺実測図

［３］飯盛鬼塚古墳の調査

１．飯盛鬼塚古墳の調査

飯盛鬼塚古墳は畑地整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査によって発見され、平成12年度において保存整備されるようになったことを受けて、整備計画基本資料を整えるべく飯盛町教育委員会は平成12年２月に発掘調査を実施した。調査内容は①地形測量・②遺構実測・③同撮影などである。

２．飯盛鬼塚古墳の構築

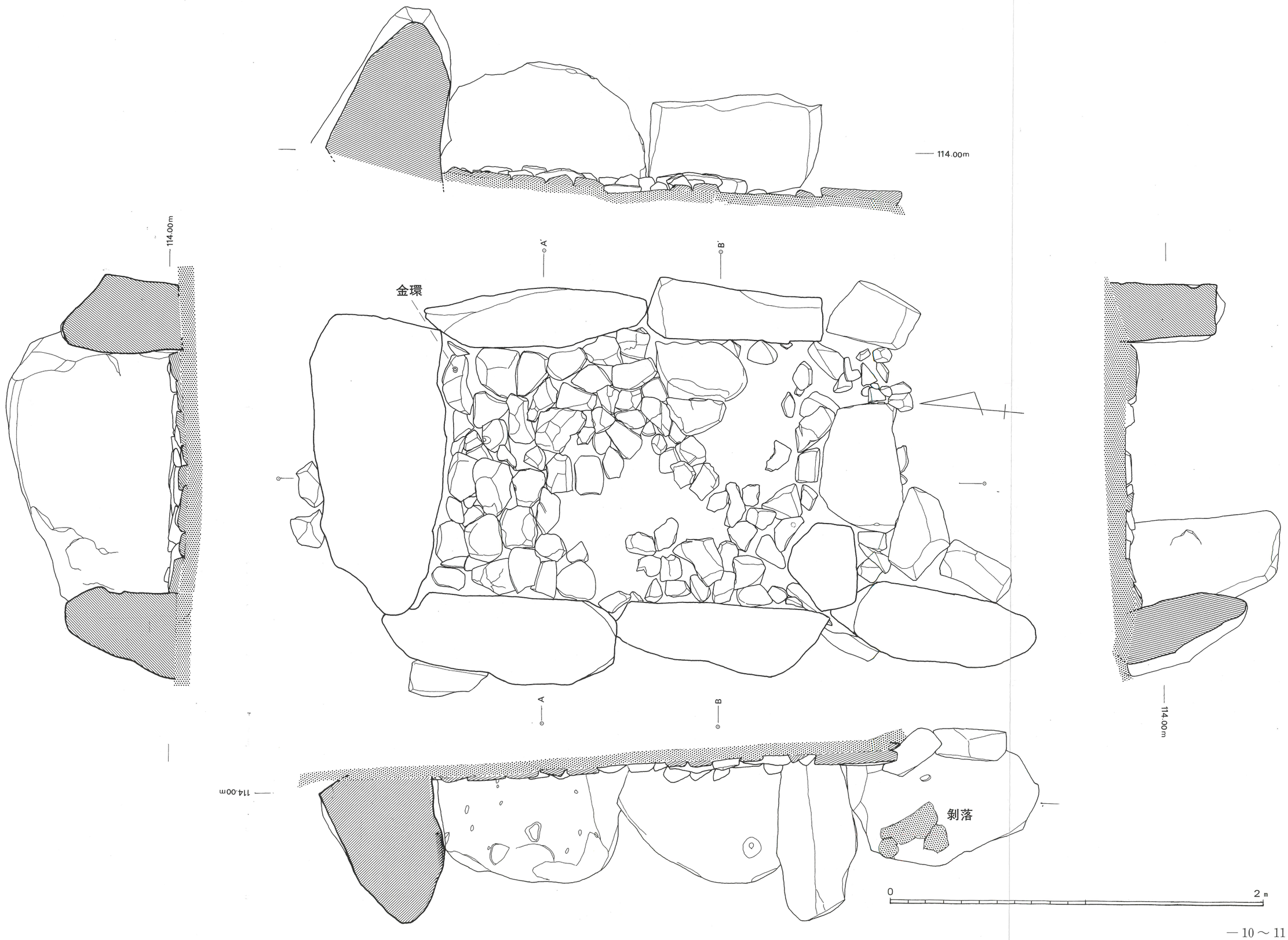
飯盛鬼塚古墳は標高114mの緩斜面畑地に構築するため、わずかながら地山を削り盛土をしたうえで遺構を構築している。

［４］遺　　構（第３図）

飯盛鬼塚古墳は、玄室と前室の一部を残し、封土と腰石以上の石材はすべて失っていた。地元の話では、漠然と「鬼塚」と称したらしいが、戦前橘湾岸の急崖に特別攻撃艇の格納施設を建設するため、近隣に石材を求めた結果古墳の石材を工事に使用したとのことであった。清掃時に天井石と考えられる玄室内に反転転落した石材を確認したが、戦前の工事によるものであろう。戦前の工事で腰石以上は運び去ったものの腰石と天井石は運搬できなかったという。調査着手時点の残存状態から、両袖の横穴式石室であることが知られ、内法は南北2.1m、東西幅1.4～1.5mを測る。天井の高さは石材がすべて失われているため不明であるが、1.5m程度と推測される。前室は西側の側壁１枚を残し外はすべて失っている。床面は一部の石材を失っているが0.2×0.3m程度の偏平な自然石を丁寧に敷設している。敷石の敷設は近くは南高来郡国見町の高下古墳に見られる。石室床面は奥壁付近で標高114.1m、框石付近で114.2mを測り、やや南側に傾斜している。框石付近はわずかながら盛土が施され床面の平坦化を図る意図が見られる。前室における同様の敷石の存否は不明である。玄室全面の西側袖石は床面からの高さが0.9m程度の角柱状の自然石が用いられている。東側の袖石は失われているものの、根石が残存しており、框石の規模からして袖石の間隔は0.7m程度と考えられる。閉塞石は残っていない。玄室の軸線はほぼ南方向を示し、橘湾に正面を向ける構築意図を知ることができる。

［５］遺　　物（第３・４図）

飯盛鬼塚古墳関連の遺物は少量である。また損傷したものが多く、出土位置を確認できるものは奥壁東隅で出土した金銅環１点のみである。原因は戦前における軍の工事による古墳破壊と戦後における塵芥焼却の影響が大きかったと考えられる。



第3図　飯盛鬼塚古墳実測図（1/20）

1．須　　恵　　器（第３図）

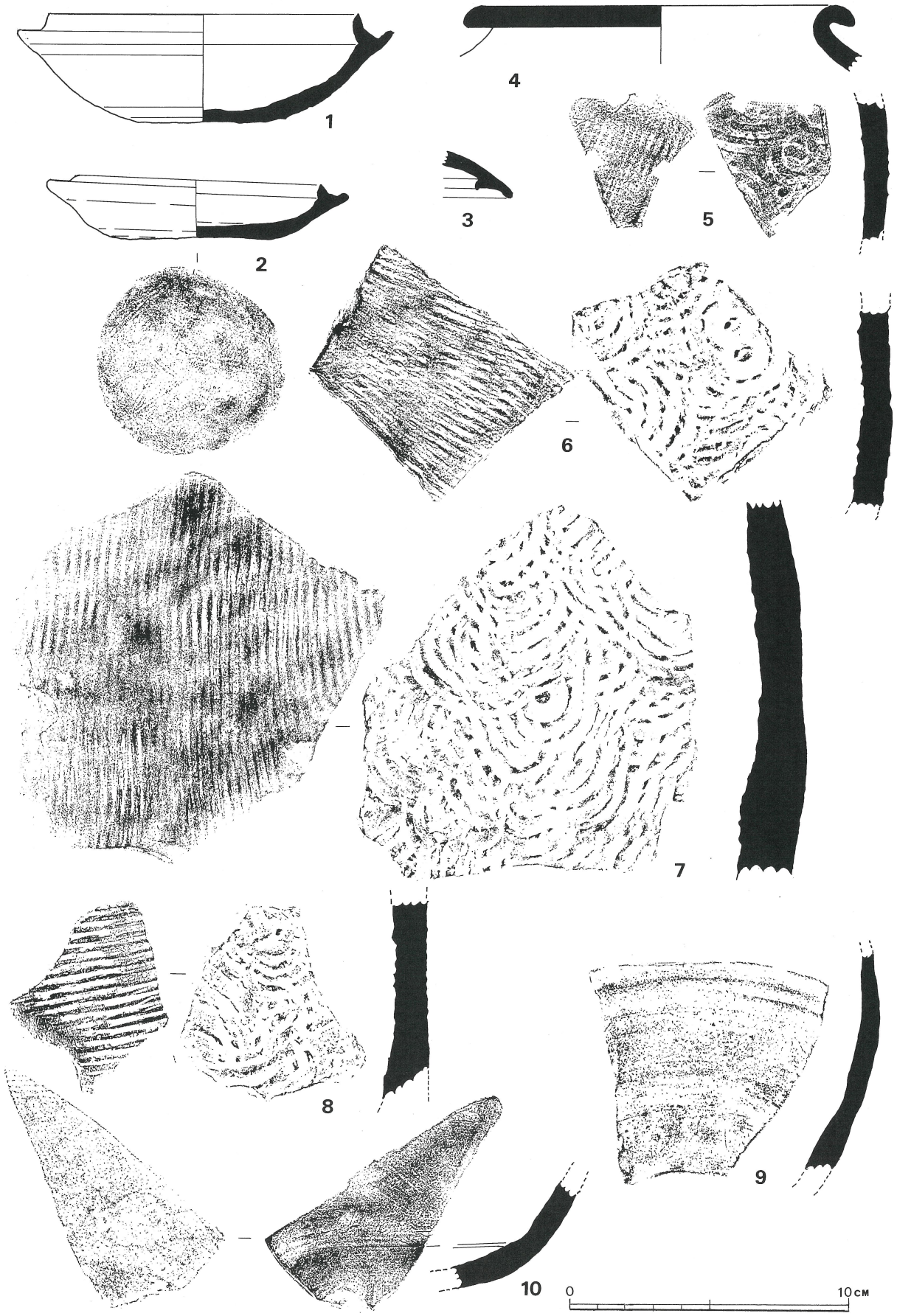
玄室に充満した塵芥の中から発見され原位置は確認できなかった。１は丸底の須恵器蓋杯である。灰色で復原径13.6cmを測り、胎土に粗い石英粒を混入している。蓋受つまみ部分は短く外反しながら内傾する。２も蓋杯である。底部がやや偏平な完形の須恵器蓋杯で径は11.0cm、焼成がやや甘い。内面は茶紅色、外面は黄灰色、部分的に茶紅色を呈する。蓋受つまみ部分は低く内傾する。３は浅い蓋杯の蓋と考えられるが小片のため法量・宝珠の有無は不明である。これらの須恵器はいずれも蓋受のつまみが低く、６世紀末ないし７世紀初頭に位置づけることが妥当であろう。４は復原口径12.0cmの短頸壷の口頸部で口縁部は屈曲気味に外反し口唇は丸く整えている。頸部は短く胴部はかなり膨らむらしい。５～８は厚手の須恵器の甕ないし壷の破片で軽く湾曲する。同種の須恵器は近隣では長崎市の東辺の離島曲崎古墳群４号墳がある。同一固体の可能性が高いが接合しない。内面はいずれも青海波の叩きを施し、外面はいずれも縦・横・斜めの叩きを施している。９・10は厚手の須恵器壷の破片と考えられ、同一固体の可能性があるが接合しない。胎土・焼成ともに良好で、湾曲する。内外面とも横方向の丁寧な調整が見られるが施文はない。

2．金　　属　　器（第４図）

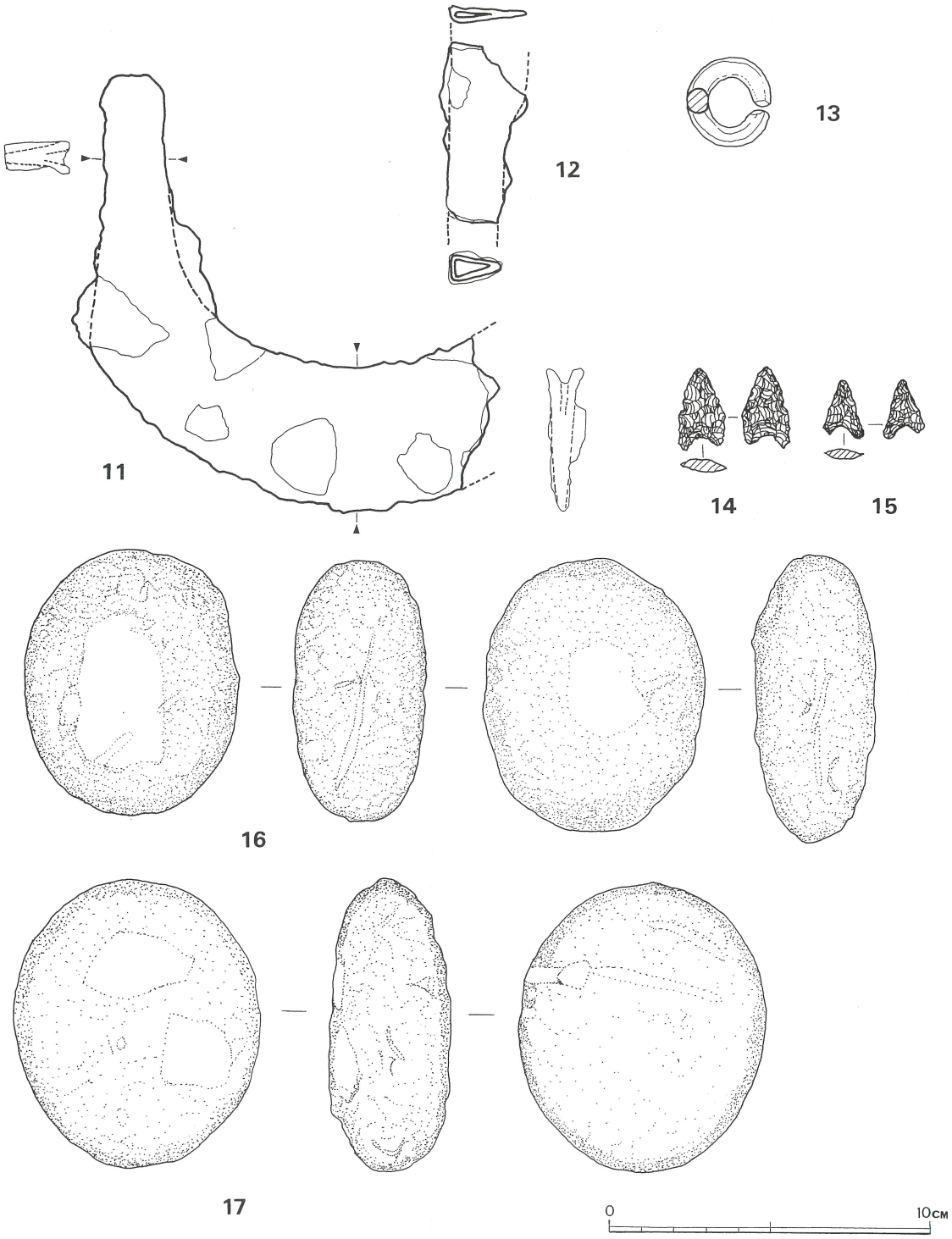
11は鉄製の鋤または鍬の一部で一部欠損している。刃部は半円形を描き刃部の最大幅4.5cmを測る。断面はＹ字形をなしスコップ状の木製柄を装着したものと考えられる。12は刀子片で現存長5.7cm、下端（柄部）は断面1.6cm×0.9cmの三角形を呈し、上辺（刃部）は3.5cm×0.4cmの偏平な三角計の断面形を呈する。13は本古墳で唯一出土位置を確認した遺物で玄室奥壁の東端部分の敷石上から出土した。上下2.8cm、左右2.6cmで、金環自体の径は0.7・0.8cmである。保存状態良好であるが一部鍍金の剝落が見られる。近隣遺跡の金環出土例は南高来郡吾妻町柿ノ本古墳・南高来郡南串山町国崎遺跡・南高来郡国見町高下古墳などがある。

3．石　　器（第４図）

14・15は古墳周辺で表面採集した黒曜石製石鏃である。14は上下長2.5cm、15は1.9cmを測る。ともに黒色半透明の良質な石材であり伊万里市腰岳産の黒曜石と考えられる。16・17は敲石であり、古墳周辺での表面採集資料である。16は長径8.3cm・短径6.7cm、重量330ｇを測る。17は長・短径が9.0cm・7.6cm、重量365ｇ、いずれもやや偏平な円礫の両面に敲打痕がある。本古墳のある丘陵に産出しない石材であり、海岸から搬入されたと考えられる。



第4図　遺物①（1/2）



第5図　遺物②（1/2）

［6］ま　と　め

長崎県本土部の高塚古墳の分布を見ると福岡・佐賀県に比較して異常とも思えるほど少なく、規模の小さいものが多いことに気づく。このことは、大きな河川流域に成立した弥生時代の生活圏を踏襲した地域と大河川に恵まれない本県本土部の違いといえるだろう。いま、長崎県本土部を、①「県北」・②「県央」・③「県南」に分ける呼称がある。「県北」は佐世保市域以北を指し、「県央」は大村湾岸の地域を、「県南」は島原半島域をいう。本古墳をめぐる「環境」の項で言及した諫早地峡は県央地域の南部を指す。これらの地域における古墳時代遺跡を見た場合、①地域は離島を除いて分布が薄く、②・③の地域には比較的分布が濃い状態がある。更に、②の地域でみると大村湾西岸地域では時津町前島古墳群・外海町宮田墳墓群がある程度で、極端な過疎状態が、諫早地峡地域は高塚古墳14・石棺群遺跡１程度で、その中間ぐらいの分布状態にあり、東岸地域（東彼杵郡・大村市）は高塚古墳33・石棺群９遺跡などと比較的濃密な分布状態がある。③の地域でみると島原半島北岸部に高塚古墳約50・石棺群30遺跡など集中した分布状態がある。②の地域で大村湾東岸一帯で古墳時代遺跡が比較的濃密なのは、彼杵川・郡川などに潤された沖積地や扇状地があり、交通の要衝にあたっていたことが背景にあると考えられる。③の地域で島原半島北岸地域に古墳時代遺跡が集中するのもなだらかな扇状地形にあることと、肥後地方の対岸に位置していたことが背景にあると考えられる。

飯盛鬼塚古墳のある諫早地峡域は小長井長戸鬼塚古墳・森山町柏原古墳群・椿川古墳群など高塚古墳14・石棺群２があるのは、この地域が河川に恵まれていないものの、有明海西部にあって交通の要衝にあたっていたことと関係があるだろう。その点、橘湾岸は河川と平地に恵まれない地域であったことから古墳時代遺跡が希少なのは当然であったと考えられる。その点、飯盛鬼塚古墳・南串山町の国崎遺跡は橘湾沿岸にあって貴重な古墳時代遺跡であると考えられる。とくに飯盛鬼塚古墳の場合、橘湾・天草灘を一望し、島原半島・天草諸島を遠望する高台に立地しており、６世紀末ないし７世紀初頭、この海域に生きた海人の首長層の墳墓であったことが考えられる。本古墳で発見された鉄製鏃先や刀子片・金環は被葬者の権勢を示すものと考えられる。一方、古墳周辺で採集した敲石は縄文時代以降、西北九州の海岸部遺跡で普遍的に出土する遺物であり、直接本古墳との関係は不明であるが、海人の使用する石器が古墳の周辺で採集されたことは、古墳被葬者の性格を暗示しているかも知れない。

編 集 後 記

飯盛町後田地区における圃場整備事業に関する埋蔵文化財存否確認の試掘調査を実施したのは1999（平成11）年９月であった。この調査中に土地の方で曲玉を採集された方があること、「鬼塚」なる小字があることを側聞した。圃場整備事業区域に埋蔵文化財包蔵状態は確認できなかったものの、この側聞は気にかかっていた。試掘調査の最後に塵芥焼却に利用されてきた土盛があり「塚」と称していたことを土地所有者から聞きおよんで「塚」の正体を確認するための清掃を行った。この結果、損壊しているものの「塚」の正体が明らかになった。飯盛鬼塚古墳の発見である。これ以前、平成９年に長崎県教育委員会が刊行した『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱの「第一節原始・古代の県央」に「飯盛町の後田名にも鬼塚という、古墳があり、鏡や勾玉などの出土がつたえられているが、詳細については不明である。」（268頁）と記されているので、今回実態を確認したことになる。

清掃当初の飯盛鬼塚古墳は焼却され溶けて黒くなったビニールが付着していて無残であったが、玄室内に転落した天井石のおかげで玄室の敷石などが保存されていたのは怪我の功名というべきか、戦前を古墳が引きずってきたことも実感された。

飯盛鬼塚古墳の発掘調査は、厳冬の二月悪条件の中で行われたにもかかわらずスムーズに進行し得たのは関係者の協力による。町経済課の方々には厳冬の中、地形測量に協力いただき、町教育委員会の方々には縁の下の役を担当いただいた。土地所有者の方々には調査の便宜をはかっていただいた。調査に直接参加いただいた地元の皆さんには厳冬の中ご苦労いただいた。これらの方々の協力なしには、飯盛鬼塚古墳は世にでることもなかったであろう。紙上ながら感謝申し上げる。

飯盛鬼塚古墳は平成12年度に整備して、後世に伝えることを町当局で決定されたと聞く。英断に敬意を捧げたい。

（正林）

報告書抄録

ふりがな	いいもりおにづかこふん
書名	飯盛鬼塚古墳
副書名	
巻次	飯盛町文化財調査報告書第３集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	正林　護
編集機関	長崎県飯盛町教育委員会
所在地	〒854-1112 長崎県北高来郡飯盛町開名1929-３　TEL(0957)48-0049
発行年月日	西暦2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		m²	
いいもりおにづかこふん 飯盛鬼塚古墳	いいもりまち 飯盛町 うしろだみょう 後田名2387	42-342	90-78	32 45 38	130 2 0	20000203 ～ 20000215	20m²	整備計画 策定

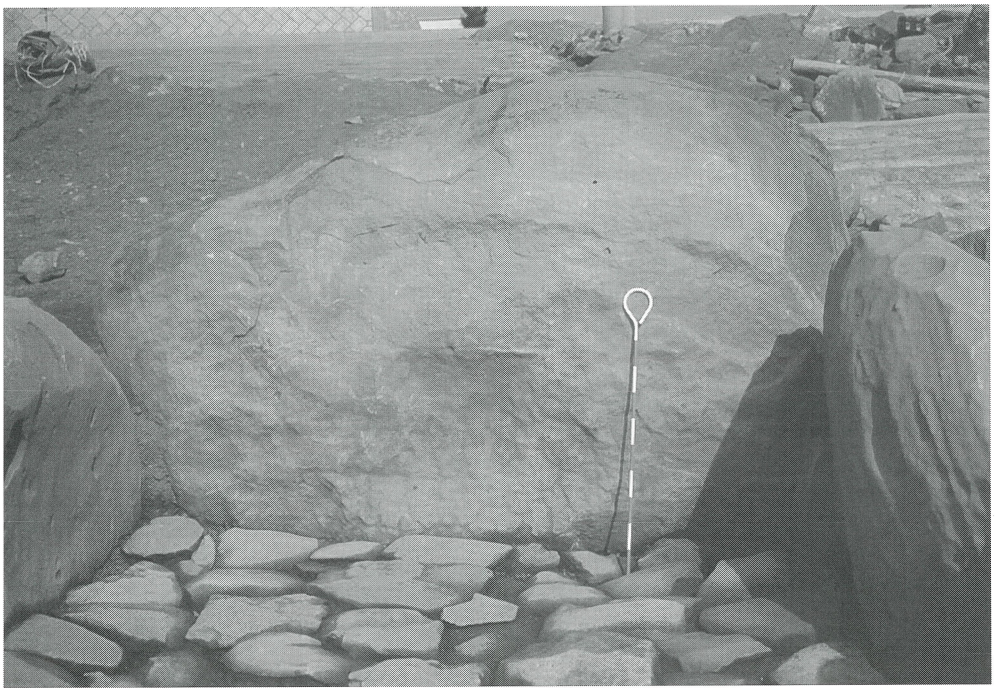
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯盛鬼塚古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	(土器) 須恵器 (金属器) 金銅環・鉄鏃・刀子	

図　　版

飯盛鬼塚古墳と橘湾

飯盛鬼塚古墳俯瞰

図版１　飯盛鬼塚古墳の周辺



図版 2　遺構（全景・奥壁、南側から）

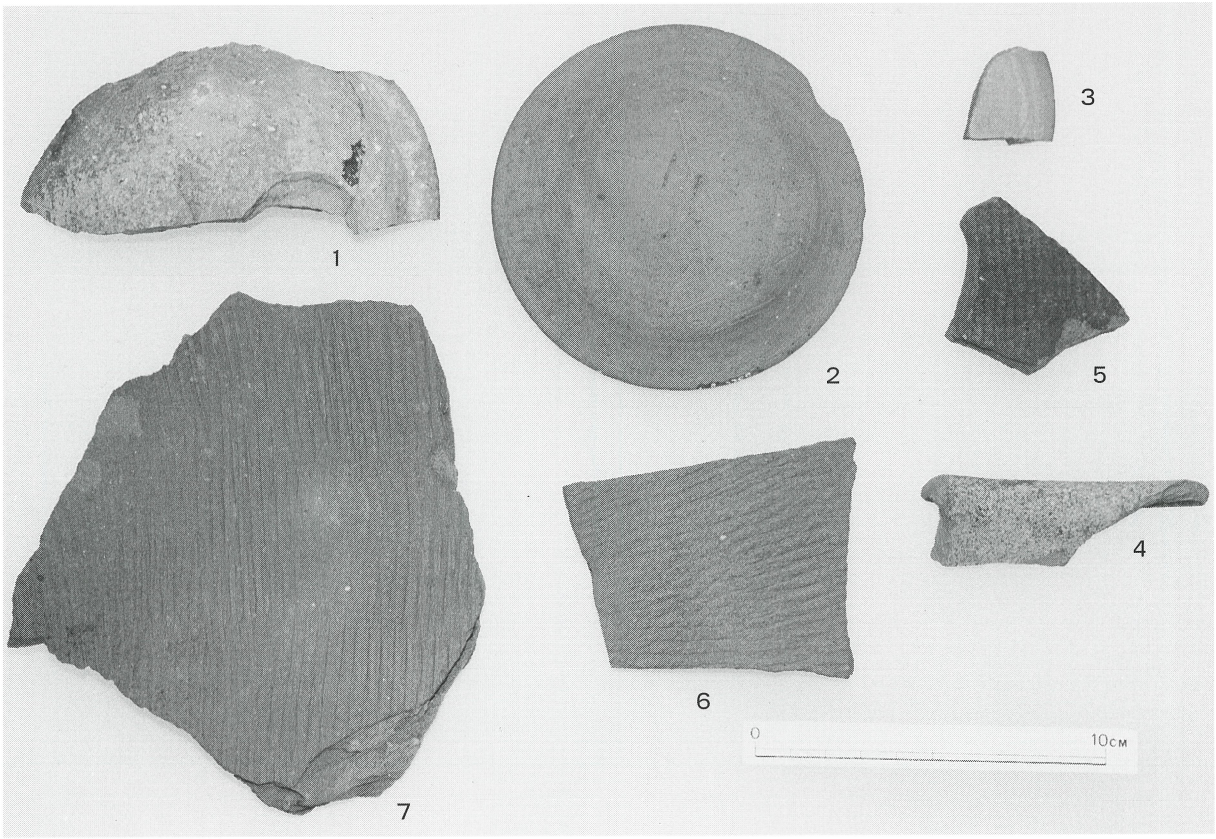
西　壁

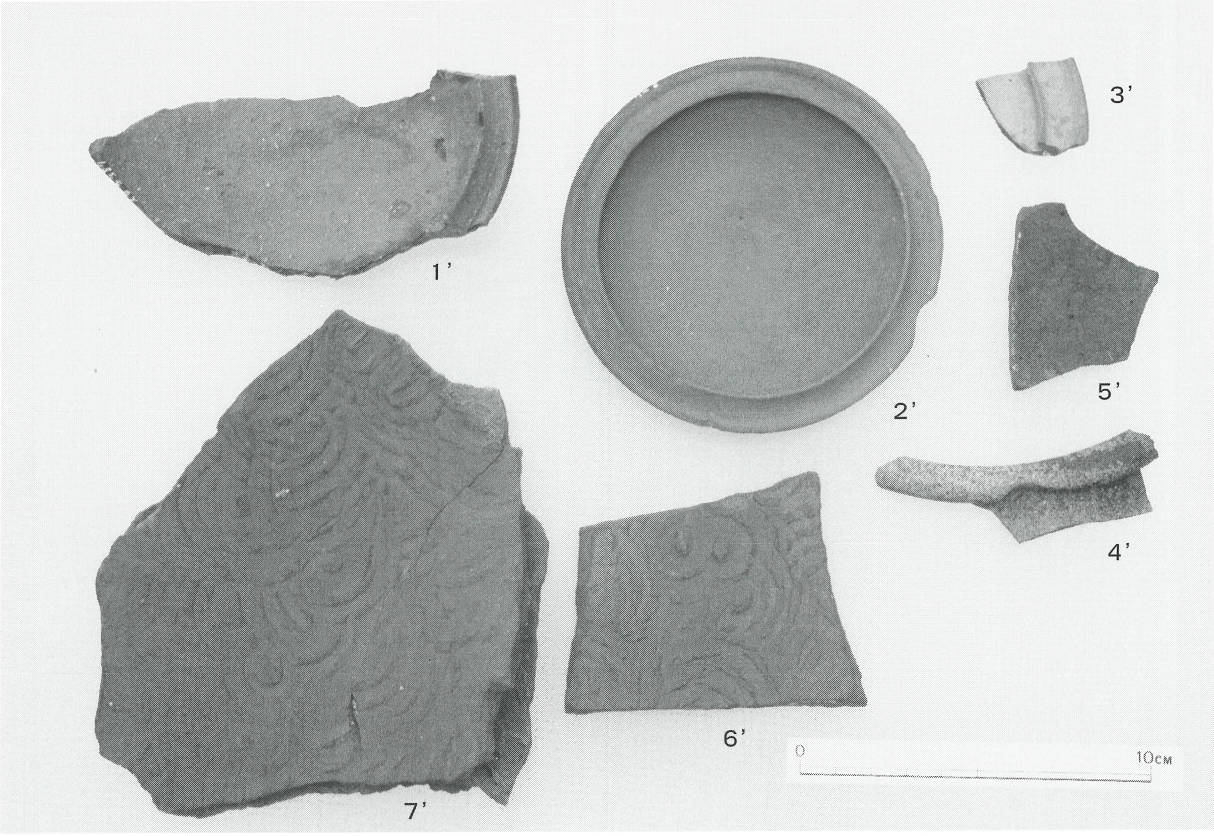
東壁と敷石

図版 3　玄室（西壁・東壁）、床面敷石

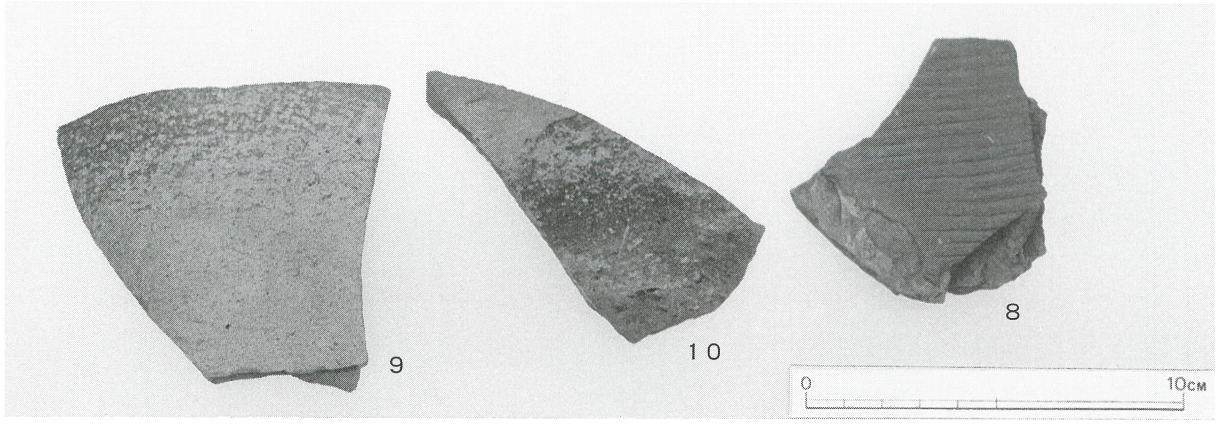
図版 4　奥壁外側と西壁内側の根石

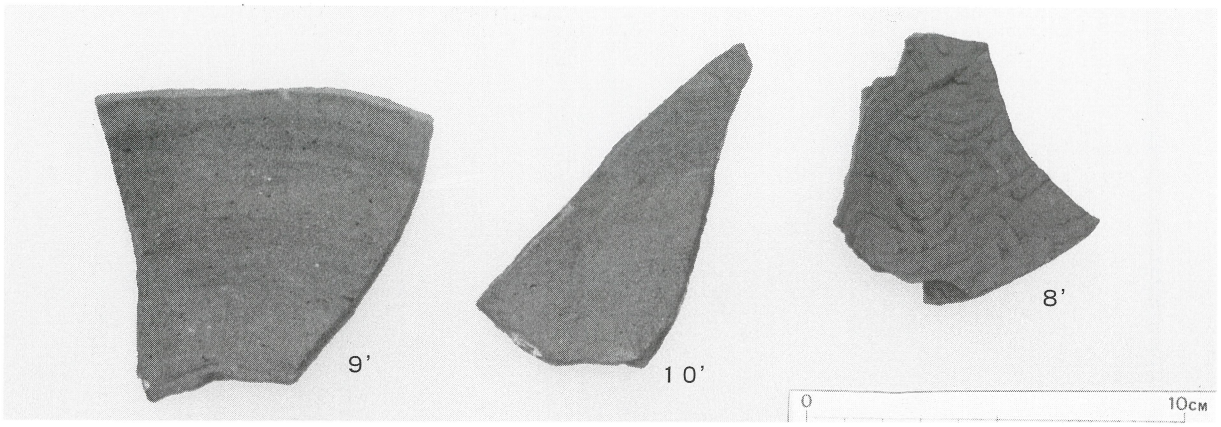
図版 5　遺物出土状況（奥壁・南隅）と床面完掘状況

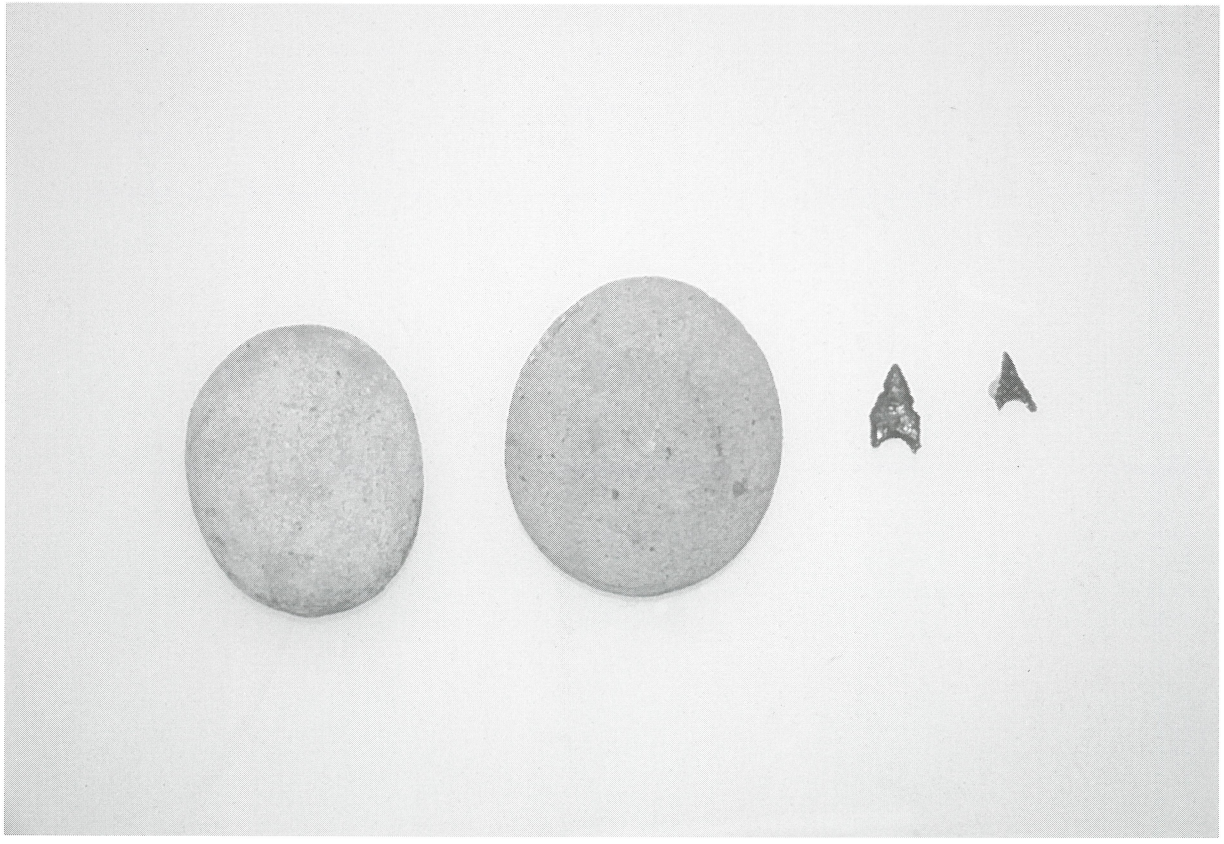




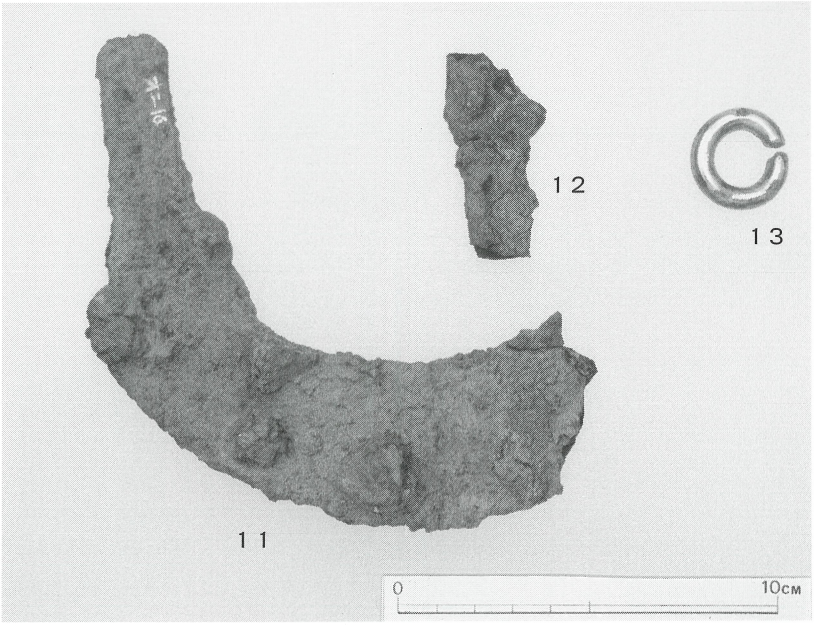
図版 6　遺物①（須恵器）







図版 7　遺物②（須恵器・石器）



図版 8　遺物③（金属器）、調査にたずさわった人々

飯盛町文化財調査報告書第３集

飯盛鬼塚古墳

２０００．３

文化振興課

発行　長崎県飯盛町教育委員会

〒854-1112 長崎県北高来郡飯盛町開名1929-３

TEL (0957) 48-0049

FAX (0957) 48-0518

印刷　㈱　昭　和　堂　印　刷

長崎県諫早市長野町1007-２